



石川 宜介

『播磨国風土記』 1 鹿庭山

梵鐘の話から突然、『播磨国風土記』にテーマが変わりました。方広寺の梵鐘鑄造（慶長19年（1614年））に芥田家、三代目 五郎右衛門 充商（家次）が脇頭領として参加し、同道した167名もの鑄物師や鑄物職人が播磨に住んでいたのです。しかし、播磨地域の製鉄や鍛造加工、鑄造技術（梵鐘も含めた）がいつごろ、どのようにして発生し成長していったかを知りたくなり、これまでの知識を日めくりみたいに年代順に一枚ずつ書き上げ、その変遷を考えてみようと思ったからです。



大撫山

『播磨国風土記』讃容郡（さよのこおり）の条に鹿を放（はな）ちし山を鹿庭山（かにわやま）と号（なづ）く。山の四面（よも）に十二（とあまりふた）の谷あり。皆鉄を生（いだ）す。難波の豊前の朝庭（みかど）に始めて進（たてまつ）りき。見頭（みあらは）しし人は別部（わけべ）の犬、其の孫（うまご）等奉発（たてまつ）り初（はじ）めき」

と記載されています。

1. 鹿庭山で鉄が取れることを発見したのは、「別部の犬」です。和気氏の部民で鉱石や鉱山を探索する特殊能力を持った人達を「犬」と言っていたのでしょうか。昔話「花咲かじいさん」でも「犬」は「ここ掘れワンワン」と地下の埋蔵物を発見しました。
2. 難波の豊前の朝庭に始めて奉る。孝徳天皇（こうとくてんのう）の御代（645～654年）。
3. 鹿庭山＝兵庫県佐用町の大撫山（おおなでさん）のこと。晩秋から冬にかけての雲海はとても神秘的で人気があります。



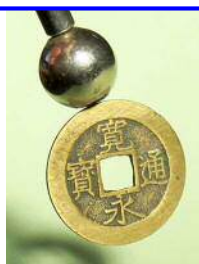
銀鍍貼金環頭大刀

『播磨国風土記』には朝鮮半島からの渡来の伝承が多い。その理由のひとつは、この播磨に考古学上の遺跡や遺物で朝鮮半島と関係のあるものが、発掘調査によって多数出土しています。実際に朝鮮文化との関係が深かったのです。（右の写真は宮山古墳出土品：姫路市）

もう一つは風土記の編纂メンバーのなかに、朝鮮半島から渡ってきた人の子孫がいたことで、国司には守（かみ）、介（すけ）、掾（じょう）、目（さかん）の四等官がありました。この頃、播磨国の大目（だいさかん）に楽浪河内（さざなみのかわち）という人がいました。この人は百濟（くだら）から日本に亡命したお坊さんの子供、つまり在日二世です。彼が風土記の編纂に携わっていたことが、渡来関係の伝承をたくさん含んでいる理由です。

来て！見て！ふれて！
ふしぎ体感

『鉄のふしぎ博物館』



宮山古墳



垂飾付耳飾

姫路市埋蔵文化財センター
Himeji City Archaeological Research Center

参考図書

播磨国風土記 上田政昭 監修 播磨学研究所編 神戸新聞総合出版センター1996
日本の地名 谷川 健一 岩波書店 1997